

ふるさとの祭り（福井経済歳時記）

福井県には数多くの祭りがあります。そこで、1月から12月まで各月の主な祭りを取り上げてみました。同時に、県内全市が登場するようにしました。

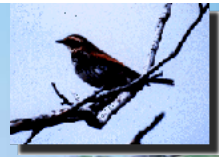
もともと、本資料は祭りの専門資料でも観光案内でもなく、あくまで経済小話です。県外から商談に来たお客様に、福井の産物と銘酒を勧めながら、福井の祭りや食が話題になった時に、経済人らしく、福井県経済の特徴をさりげなく解説することを想定して作成しました。また、県民の皆さんが郷土の祭りを通じて、福井県経済の成り立ちを知る機会になれば幸いです。

<本資料で紹介している祭り>

	祭り	開催地	内容
1月	水仙祭りと大陸文化	越前町、 福井市越廼	福井県の県花・県木・県鳥・県魚は、冬の越前岬と大陸を結ぶ
2月	左義長祭りと羽二重餅	勝山市	羽二重餅は福井の繊維企業そのものだから、福井の銘菓になった
3月	神宮寺のお水送り	小浜市	若狭は古代、京都に「塩・鯖」を送り、今は関西に「電力」を送る
4月	越前時代行列と福多き国	福井市	福井は「幸福」「裕福」「満福」など、福が居(井)る国である
5月	伝統産業の春祭り	鯖江市、越前市、越前町	福井県人には、伝統産業で培われたモノ作りDNAがある
5月	三国祭りと幕末	坂井市	北前船の三国湊は、幕末越前藩の懐を支えた
6月	花菖蒲祭りと藤野先生	あわら市	福井県の教育熱心さは中国の文豪にも伝わっている
7月	半夏生の焼き鯖と福井の夏	大野市	福井の夏は「半夏生の焼き鯖」で乗り切る
8月	永平寺の灯籠流しと匠の国	永平寺町	京は「雅」、近江は「商人」、若狭は「御食国」、越前は「匠」の国
9月	気比神宮の例大祭	敦賀市	敦賀は大陸と京を結ぶ表玄関である
2月 秋・冬	ごぼう講 報恩講	越前市 各地	門徒や集落の絆を確かめるため、今も多くの講が持たれる
10月 (注)	新酒祭りと福井の水	各地	福井の銘酒は、米、技術、名水が織り成す、将来の成長産業である
11月	蟹祭り・蕎麦祭り	各地	福井県民は皇室エピソードが大好きである
12月	クリスマスイブの焼き鳥と福井の社長	福井市	福井の焼鳥屋では、男は皆、社長になる

(注) 新酒祭りは例年3月開催だが、2011年は震災の影響により10月である。

「水仙祭りと大陸文化」（1月、越前町、福井市越廼）



写真提供: 福井県

福井の冬の花といえば越前岬に可憐に咲く「水仙」がその代表であろう。越前岬では、毎年一月後半から二月にかけて水仙祭りが開催される。

ところで、水仙は古代、日本の花ではない。地中海で自生していたものが、シルクロードで中国に渡り、さらに日本に来たらしい。中国から越前岬にどのようにして来たのか定かではないが、大陸でポチャリと海に落ちた水仙の球根が、日本海を漂い越前岬に流れ着いたのかも知れない。そういえば、大陸から海に乗り出すと九州には漕がなければ辿りつけないが、福井には日本海流と偏西風に乗って流れ着く。島根県隠岐島沖で遭難したナホトカ号は三國海岸に漂着したし、中国沿岸で発生する大型クラゲは福井に流れ着くことから「えちぜんクラゲ」と称される。和紙・漆器・織物などの技術も、こうした海流に乗って福井に来たのかも知れない。

福井県人は、冬の越前岬で風雪に耐える「水仙」をけなげな花として愛し県の花としている。県の木である「松」は冬の越前岬がよく似合う。県の鳥である「つぐみ」は冬に大陸から越前岬に渡って来る。県の魚である「蟹」は、冬の味覚の王様である。福井県人は、花も木も鳥も魚も、冬の越前岬と大陸を結ぶものばかりを選んでいる。

そういえば、韓国映画をみると、韓流スターが福井弁で話しているような気がするのはなぜだろう。

「左義長祭り」と羽二重餅（2月、勝山市）



写真提供：勝山左義長ばやし保存会提供

一月から二月にかけて、県内の多くの神社で左義長祭りが開催される。二月下旬に開催される勝山左義長祭りは、老若男女、子供までが色とりどりの長襦袢を着て、左義長ばやしに乗り、浮き太鼓に打ち浮かれる。作家の椎名誠が日本一と表する奇祭である。

勝山市は、雑誌フォーブス（二〇〇七年）の綺麗な都市ランキングにおいて、世界で第九位、アジアで第一位に選ばれた奥越の美しい都市である。古代の名刹「平泉寺」、世界的な規模を誇る「恐竜博物館」が有名であるが、さらに一昨年夏に「ゆめおくれ勝山」が開設された。廃業となった機屋を残したもので、「羽二重織」の構造などを知ることが出来る貴重な建造物である。

繊維王国と言われる福井だが、勝山には今も高い技術を有する織物企業が多い。福井県企業の特徴は、規模は小さいが、逆境の経営環境でも粘り強く、衣類から産業用資材まで多様な商品を手掛け、美しく仕上げる高い技術がある。

一方、福井の代表的なお菓子と言われる「羽二重餅」だが、一つ一つは小さいが、粘りがあり、真っ白な餅から餡入り、黄な粉・よもぎ・胡桃とのコラボまで多様な商品があり、高い技術でおいしく仕上げられている。

「羽二重餅」は、福井の繊維産業の特徴を引き継いでいるから、福井の代表的なお菓子なのである。

「神宮寺のお水送り」(3月、小浜市)



写真提供: 小浜市

小浜市は若狭にある人口三万人の古い町で、百三十七もの寺があると言われている。その中で最も古いお寺が、お水送りの神宮寺である。神宮寺から鵜の瀬にお香水を流すと、地下通路を十日かけて奈良東大寺二月堂の若狭井と呼ばれる井戸に届く。東大寺では、その水を汲んで修二会を行なうのである。若狭の水は、古代より名水の誉れが高かったということであろう。

若狭の国は「御食国」と称され、若狭でとれた塩や魚は「鯖街道」を通じて京都に送られた。また、小浜港は日本海側の物資を畿内に持ち込む主要港であり、十五世紀に日本に最初に来た象も小浜で上陸し京都に上洛した。

もつとも、江戸期に北前舟の西回り航路が開設され、明治以降の高速交通網からも外れたため、現在の若狭に大きな商業港湾はない。

一方、「御食国」としては、浜焼き鯖、焼き鯖寿司、へしこ、若狭ふぐ、小鯛の笹付けなど、豊富な海の幸が揃う。さらに、日本最大の原子力発電地域として、関西地区に電気を送り続けている。

古代には「塩」「水」「鯖」を送り、現在は「海の幸」や「電力」を送ることで、関西経済の一部であり続ける若狭である。

「越前時代行列と福多き国」（4月、福井市）



福井市の春は、足羽川沿いの桜と「越前時代行列」で満開となる。時代行列の最後を飾るのが柴田勝家とお市の方である。今年にはNHKの大河ドラマで、お江の過ごした北の庄が全国に放映されている。北の庄はいまでもなく福井のことであり、福井駅近くの北の庄城址公園にその名残をみることができる。

ところで、「福井」という地名はいつから使われているのだろうか。歴史書によると、江戸時代の第三代藩主である松平忠昌が、「北」は「敗北」に通じるとして嫌い、福が居る国という意味で「福居」に変えたとある。

さらに、江戸中期に「福井」に転じている。その理由は、福井城の中に井戸があったためとか、江戸幕府が書き間違えたためとか諸説あり、真相は定かでないが、福井に「福」が多いことは間違いない。

福井は、結婚すると離婚せず、就職すると転職せず、一度住むと引越さない「幸福」の地である。広い持ち家、多くの乗用車、多額の貯蓄金を有する「裕福」の地である。コシヒカリを生み、越前ガニ、若狭ふぐ、焼鯖寿司、越前蕎麦を食し、日本有数の銘酒が揃う「満福」の地である。

福井に数多くの「福」が「居」ることは疑いないが、飲み過ぎ、食べ過ぎには注意を要す。なお、「満福」という漢字は辞書にはない。

「伝統産業の春祭り」(5月、鯖江市、越前市、越前町)



写真提供：福井県、越前和紙工業協同組合

五月になると、鯖江市の西山公園のつつじ祭りなどに多くの観光客が集まるが、越前漆器、越前焼、越前和紙など福井の伝統産業の産地でも祭りが開かれる。

越前漆器は、継体天皇が皇子の頃、壊れた冠の修理を鯖江市片山の塗師に命じたところ、見事な出来栄えに仕上がった。そのことに感心し、漆器作りを行うよう奨励したことを嚆矢とする、千五〇〇年の歴史を誇る伝統産業である。GWの漆器祭りでは、漆器の展示即売や絵付け体験などが開催される。

越前焼は、越前町宮崎・織田地区で焼かれる陶器である。その歴史は平安時代に遡り、日本六古窯の一つと称される。江戸末期から明治にかけて衰退し、廃絶の危機に追い込まれたが、現在は越前陶芸村を中心に窯元が復活している。陶器市には当地の窯元が集結し、販売会や茶会などが開かれる。

越前和紙は、越前市旧五箇村を中心とする、千五〇〇年の歴史を誇るわが国最大の和紙産地である。当地の「岡太・大瀧神社」は川上御前を紙祖神とする国の重要文化財でもある。GWには古式の伝統により春季例大祭が執り行われる。

越前和紙産地では、江戸時代に日本最古の藩札を漉き、明治初年に発行された日本最初の政府紙幣を漉き、明治中期には日本銀行の透かしの技術を開発した。

福井県には、高い技術力を有する中小企業が多いが、その背景には、古代より培われてきたモノ作りのDNAがある。

「三國祭りと幕末」（5月、坂井市）



写真提供：三國祭保存振興会

三國祭りは、五月十九日から二十一日にかけて、六m近くもある六台の山車が、数百の露店が連なる通りを練り歩く、北陸三大祭りの一つである。北前舟の主要港としての繁栄が三國の町並みにしばし甦る。

北前舟は、江戸時代に北陸以北の沿岸諸港から関門海峡を経て瀬戸内海の大坂に至る海運ルートである。江戸時代の徳川幕府は、各藩が自由に交易するのを嫌い、米や各藩の特産品は大坂に集められた後、江戸などに送られた。

しかしながら、江戸末期に幕府の統制が緩んでくると、幕末雄藩は一斉に交易拡大に乗り出している。長州藩は、下関を内国海運の中心港に育て、大阪の商機能の一部を取り込むことで発展している。薩摩は、琉球との密貿易で藩財政の建て直しを進めている。そして、福井藩は、ペリー来航により国が開かれるや否や、全国に先駆けて長崎のオランダ商会と生糸貿易を始めたほか、蝦夷地への藁製品の輸出などにも力を注ぎ、多額の金銀を得ている。

松平春嶽は、坂本龍馬に神戸海軍操練所の運営資金五千両をポンと出し、幕末の表舞台に出てくるが、その懐を支えた三國湊である。

「花菖蒲祭りと藤野先生」（6月、あわら市）



写真提供：福井県

あわら市の北潟湖畔では、毎年六月に三〇〇種二十万株の花菖蒲が咲き揃い、花菖蒲祭りが開催される。

ところで、あわら市と言えば芦原温泉である。明治一六年に開発が始まり、十五軒の温泉旅館（組合加盟）が軒を並べる、関西の奥座敷とも言われる温泉地である。もともと、他の温泉地と同様、近年は宿泊者数が減少傾向にある。そこで、外国人観光客、とりわけ、ショッピングと温泉が好きな中国人観光客を取り込む方策が議論されており、その秘策が「藤野先生」である。

あわら市は、藤野先生の出身地である。藤野先生は、中国の文豪魯迅が、日本留学中に医学を学んだ恩師である。日本人は藤野先生を知らないが、中国人は、人種的偏見を持たず、熱心に指導した藤野先生を教科書で学び、皆知っている。あわら温泉街にある藤野巖九郎記念館に行くと、藤野先生が如何に熱心に魯迅を指導したかを窺い知ることができる。

福井県は、小中学生の学力日本一を誇る教育県であるが、その教育熱心さは、中国の文豪にも伝わっている。

「半夏生の焼き鯖と福井の夏」（7月、大野市）



福井県は古より鯖と深い関係にある。

若狭で水揚げされた鯖にひと塩をふって鯖街道を夜どおし駆けると、京都につく頃には良い塩梅になったそうだ。最近では、「浜焼き鯖」「焼き鯖寿司」「へしこ」がお土産品として人気である。

鯖は若狭だけでなく、越前にも広く浸透している。大野藩は山間部を中心とする四万石の小藩だが、夏至から数えて十一日目（七月二日頃）の半夏生に焼き鯖を食する習慣がある。四三〇年前に大野城と大野の街を作った金森長近が、夏場の栄養食として焼き鯖を食すのを藩民に奨励したことを嚆矢とするらしい。

この大野藩は、江戸後期に至ると、藩主土井利忠の下、北前貿易に乗り出し、大野屋という商店を各地に設置し、果ては大野丸という帆船を敦賀港に浮かべ、樺太開発に乗り出している。こうした大野藩の先進性は、松平春嶽を藩主とする福井藩の藩政改革にも大きな影響を及ぼしている。

福井の夏は意外に暑い。江戸のお金持ちは「土曜丑のうなぎ」を食べるが、質素堅実な福井県人は、丸ごと焼いた「半夏生の焼き鯖」で乗り切る。

「永平寺の灯籠流しと匠の国」（8月、永平寺町）



写真提供: 福井県

福井の夏は意外に暑いが、多くの町で夏祭りが行われる。三国、敦賀、福井などの花火。よさこいっちよらい、O T A I K O 響けなど若者の新しい祭り。そして、夏の終わりの風物詩は灯籠流しであろう。永平寺の灯籠流しは、永平寺の雲水らによる読経の後、九頭竜川に一万個の灯籠が流される。

日本最大の一五千所寺を誇る曹洞宗だが、その総本山永平寺は、開祖道元が延暦寺による弾圧を受け、木の芽峠を越えた越前に修行の地を求め開かれた。信者だけでなく多くの観光客が訪れる観光地でもある。

日本最大の信者数を誇る浄土真宗が初めて本格的に広がったのも福井である。浄土真宗の中興の祖である蓮如は、延暦寺による弾圧を受け、石川県との県境近くに布教の地を求め吉崎御坊を開いている。

道元も蓮如も、京都や近江で延暦寺に弾圧され、木の芽峠を「越」えた越の国に入るが、「越前・越中・越後」と続く「越」の国の中で、最も京都に近い「越前」が選ばれているところが、「越前」という地の特長を示している。

関西圏には含まれないが、畿内文化が流入し、織物・和紙・漆器・刃物・焼き物など、数多くの工芸品の産地を形成している。

京に最も近い近江は「商人」、若狭は「御食国」だが、木の芽峠を越えた越前は「匠」の国である。

「気比神宮の例大祭」(9月、敦賀市)



写真提供: 福井県

秋になると県内いたるところで秋祭りが行われるが、その代表といえ、北陸総鎮守であり、越前一ノ宮でもある気比神宮の例大祭であろう。余談ながら、敦賀市は嶺南のため若狭だと思われているが、律令制における敦賀は越前である。敦賀の気比神宮は越前国の一ノ宮である。

さて、敦賀気比神宮の「気比」は、「食(ケ) 霊(ヒ)」という意味で、古代敦賀から朝廷に贄(にえ)を貢納したため、御食国の神として気比神宮となったと言われている。古代、敦賀の塩は天子の用いるところとされた。大飯や小浜で製塩された塩が、敦賀で集められ、琵琶湖の塩津ないし海津を経由して京都に運ばれたようだ。

また、敦賀港は大陸交流の表玄関という歴史をもっている。敦賀という名称は韓国の角鹿王(つぬがおう)が訪れたことから、敦賀という名称になったとされるように、大陸との繋がりが深い。戦前は敦賀港からウラジオストク経由で欧亜鉄道と結ばれていた。

戦後は、太平洋側の大規模港湾に押されてきたが、アジア経済の成長の下で、再び日本海側の拠点港を目指す敦賀である。

「ごぼう講」と「報恩講」

ごぼう講（2月、越前市）



もっそ飯(米5合)、ごぼう、沢庵、豆腐

写真提供：福井県

報恩講(10月～1月、各地)



ご飯、厚揚げとじゃがいも、ナスの煮物、冬至南瓜、お茶、冬瓜の煮物、麩ときゅうりのカラシ和え、味噌汁、すこ(里芋(ハツ頭芋))の茎の酢割け

福井県には、多くの講が存在する。

講は、そもそもは経論を講説する法会であったが、門信徒の村落生活の憩いの場となり、生活のはけ口となり、時には一向一揆にも発展した。

報恩講は、浄土真宗の宗祖である親鸞聖人に対する報恩感謝のために行われる法要で、真宗門徒にとって年間最大の行事である。その報恩講での昼食をおときと言ひ、門徒が持ち寄った材料で、にぎやかな昼食会がもたれる。

ごぼう講は、越前市国中の村落五十戸が持ち回りで毎年二月に開催する、三百二十年の歴史を誇る神事である。持ち回りで当番となった家は、五合の白米と、山盛りのごぼう、沢庵、豆腐を載せたお膳を五十人分用意し振舞う。しかも五十人分のお膳が一同に並べられる家を構える必要があるため、村落の家は皆大きい。因みに、福井県の家は今でも平均一七〇平米を超えている。

講に観光客や他所者はいれないため、一般の人には知られていないが、今も福井では、門徒や集落の人たちの絆を確かめつつ、多くの講が持たれている。

「新酒祭りと福井の水」（23年は10月予定）

福井県には三五の蔵元があり、しかも銘酒揃いである。

多くの蔵元が一同に会しフェニックスプラザで開催される新酒祭りは、前売券千円で蔵元自慢の新酒が心行くまで飲める、日本酒通には見逃せないイベントである。福井にはなぜ、これだけの銘酒が揃っているのだろうか。福井の米、技術、そして名水が織り成す奇跡であろうか。

海外に目を転じると世界的な日本食ブームである。今やパリのフレンチでも日本食のセンスを取り入れることがミシュラン星を獲得する近道と言われている。日本食には、白ワインも合うが、やはり日本酒がよく似合う。

日本酒の仕込みには名水が欠かせない。日本酒にとっての名水とは、ミネラルウォーターではない。清らかな軟水であり、その存在は世界を見渡しても極めて限られている。福井県は全国五位の降水量を誇り、伏流水が多く、名水の産地である。

昨今、日本の工業技術の海外流出や有力企業の海外移転が問題となっているが、優れた水や自然がなければ成り立たない日本酒は、海外流出・移転の心配のない成長産業かも知れない。

その可能性を探るために、飲み比べる日々である。

「蟹祭り・蕎麦祭り」（11月、各地）

蟹祭り・蕎麦祭り
全日本素人そば打ち名人大会
第十五回
11/5 金曜日 - 6/7 日曜日
AM10:00 ~ PM4:00
会場
福井県産業会館

写真提供: 福井そばルネッサンス推進実行委員会

十一月は、蟹が解禁となり、越前海岸や三国港では蟹祭りが開催される。また、新蕎麦の季節でもある。産業会館で開催される「全日本素人そば打ち名人大会」は全国的に有名であるが、美山で、大野で、今庄でと、県内各地でそば祭りが開催される。

福井の蕎麦は、そもそも「おろし蕎麦」と称されていたが、昭和天皇が「あの越前の蕎麦はおいしかった」と仰せられたことから、「越前蕎麦」となったらしい。いかにも皇室を重んずる福井県人らしいエピソードである。そういえば、福井県最大の偉人といえば継体天皇であろう。「越前人が、その勢力をひきいて倭政権の首長になった」ということは、尋常ならざる出来事と断言していい」（司馬遼太郎）ということであろう。

「越前蟹」も皇室に献上される。越前蟹も皇室は好きなのだろうが疑問に思っていたら、当地を代表する経済界の重鎮が「春の園遊会で皇后さまにお会いしたとき、『毎年楽しみにしています』と言われた」と誇らしげに語っていた。

さらに、県内の有名蔵元のお酒も、皇族に愛されているという噂をよく聞く。

ともかく、福井人は皇室エピソードが好きである。

「クリスマスイブの焼き鳥と福井の社長」(12月)



写真提供: 秋吉グループ

今年も早いものでクリスマスが近づいてきた。福井では、クリスマスイブに七面鳥やケンタッキーフライドチキンではなく、焼き鳥を買って帰るのがお父さんの役割らしい。クリスマスイブに焼鳥屋に行くと、一時間以上待たなければ焼き鳥を持ち帰れない。

ところで、福井最大の焼き鳥チェーン店に行くと、男性客は皆「社長」と呼ばれる。そういえば、福井は人口当たりの社長数が日本一である。福井ではなぜ社長が多いのであろうか。福井の織物産業の歴史を見ると興味深い。

明治以降の日本の織物産業は、富岡製糸工場に代表される群馬や栃木など北関東で始まったが、北関東では中央資本の下請け、賃織りから発展せず、社長になる人は少なかった。

これに対し福井県では、地元の商人から徐々に広がり、昭和初期には普通の農家が卵の後の竹の子のように、機屋を立ち上げている。ある村落の記録では「機屋をしないと村では馬鹿のように言われる」として、機屋業に進出する農家が相次いだ。大阪朝日新聞が「無茶な転向を慎むよう」警告したほどである。

北関東では、下請けが中心であった機業が、福井ではなぜ農家までもが社長になるのか。伝統産業で培った技術力、農地が狭く子沢山で勤勉な労働者、講で培われた自立心とまとめ、理由は様々考えられるが……

ともあれ、福井の焼鳥屋では、男は皆、「社長」になる。

(あとがき)

福井県には祭りが多い。村落毎に、寺社毎に、季節毎に祭りが開かれる。

福井県に祭りが多いのは、信仰心が篤く、絆を重んじる県民性が挙げられる。福井県の人口当たりの神社・寺社数は日本で最も多い。

高度成長期に全国では都市部への人口集中により農村社会は崩壊し、都市部は人の繋がりが希薄化した。福井県では、繊維産業が農村で発展したため、地域コミュニティが残り、祭りが残った。

福井県の祭りをみると、古代、大陸文化の玄関として発展した県らしく、神社を中心とした祭りが目に付く。中世、曹洞宗や浄土真宗の教えが全国で最初に広がった県らしく、寺社の行事が県民生活に浸透している。近代、殖産興業に逸早く目覚め、繊維王国を築いた県民気質が祭りに垣間見られる。そして、蟹祭り、蕎麦祭り、新酒祭りなど、豊かな自然の恵みに感謝した祭りが数多くみられる。

福井の祭りは、観光客を目的とした派手なものではなく、祖先と地域と自然の恵みに感謝する、福井人の信仰心の篤さと絆の強さが表われている。

本資料の文責は筆者（松原淳一）に属し、日本銀行の公式見解を示すものではありません。日本銀行は、本資料の利用者が本資料の情報を用いて行う行為について、責任を負うものではありません。本資料で示した見解を他の公表物に転載・複製する場合は、出所を明記して下さい。